

第2章 軽度失語症者の談話の聴覚的理解力

2.1 失語者の談話の理解の文献

失語症者の理解に関する多くの研究では、単語や短文の言語素材が文脈を排した状況で用いられてきた。しかし、日常のコミュニケーション場面では、単語や短文の理解だけでなく、談話の理解も必要である (Stachowiak et al., 1977)。この談話の理解には語彙解析、統語分析、意味分析のような多層的な解析が加わり、談話の構造的な意味が特定される (Carpenter et al., 1995)。

失語症者の談話理解に関して、数は少ないが現在までに以下のような研究が行われてきた。Stachowiak ら (1977) は慣用句を談話中に挿入し、文脈がその慣用句の理解を促進するか検討した。Waller と Darley (1978)、および Hough (1990) は、談話の直前に内容に関係する先行刺激を置き、談話の理解に及ぼす効果を調べた。談話内の重要語句を強調する実験は Pashek と Brookshire (1982) が行っている。その他、談話中のあいまい語の同定 (Bond & Ulatowska, 1985; Chapman & Ulatowska, 1989)、談話の発話速度 (Pashek & Brookshire, 1982; Brookshire & Nicholas, 1985; Nicholas & Brookshire, 1986)、文法的複雑度を変えた談話の理解 (Caplan & Evans, 1990) などが失語症者の談話理解について調べられている。また、談話には主要内容として、あるいは末梢的な内容として区別されるべき情報がある。Brookshire and Nicholas (1984)、Wegner ら (1984) and Nicholas and Brookshire (1986) は、失語症者は「主要内容」を「末梢内容」より良く理解できると報告した。

これら諸家の研究で、失語症者の談話の理解に関して、ほぼ一致した

知見をまとめると次の 3 点であろう。1) 談話は、単独文よりも良好に理解される。その理由として、談話の中には、文脈 (Brookshire & Nicholas, 1984), 冗長性 (Stachowiak et al., 1977; Pashek & Brookshire, 1982), 社会的 content (Chapman & Ulatowska, 1989) などが含まれている。これらは、失語症者が理解できなかつたり、あいまいだった文に対して、意味を推論する手助けをしている。2) 冗長性の少ない Token test と談話の成績との相関は極めて低い。3) 日常では単語や短文も冗長性の高い文脈コミュニケーション状況で使われるため、日常場面での理解力は冗長性のある談話の成績から推測した方がよい (Stachowiak et al., 1977; Waller & Darley, 1978; Brookshire & Nicholas, 1984; Wegner et al., 1984; Hough, 1990; Nicholas & Brookshire, 1986; Caplan & Evans, 1990)。これらは、従来の単語や短文の理解を孤立的に評価した方法からでは、予想できなかった結果である。談話の方がよく理解できるという発見は、談話の理解が単に短文の理解の集積ではないことを意味している。

ところで、日常場面における失語症者の真の理解力を実用的に把握する必要が求められている (Damico et al., 1995)。上記談話研究の多くは、談話の方が、日常生活に必要な理解能力をより正確に反映している可能性があるとしている (Stachowiak et al., 1977; Waller & Darley, 1978; Pashek & Brookshire, 1982)。しかしながら、以上の研究でつかわれた談話は、小学校高学年程度の読み物をゆっくりした速さで提示したものが多く、これでは日常場面における理解能力の実証的な把握にはなりにくい。さらに、談話を理解するには、同時にその談話内容も把持されなければならない (Daneman & Carpenter, 1980; Frisk & Milner, 1990; Just & Carpenter, 1992)。しかしながら、現在まで、失語症者の談話の把持能力を検討した研究はまったくない。